中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題

林　　範　彦

Issues in the Reference Grammars of Tibeto-Burman Languages in China and Its Neighboring Area

HAYASHI, Norihiko

Keywords: Tibeto-Burman, Mandarin Chinese, tonogenesis, conjunct/disjunct, word class

キーワード: **チベット・ビルマ諸語，漢語，声調発生，接合/離接，語類**

1. はじめに
2. 主としてチベット・ビルマ系から発信された有名な言語学用語/言語現象
3. 中国研究者の参照文法書の特徴と問題
4. 中国周辺領域の良質な TB 参照文法書
5. おわりに

1. はじめに

本稿[1]は 2017 年 7 月 15 日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開かれた共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」研究会にて同名のタイトルにて発表した内容を改訂したものである。本研究会では副代表である澤田英夫教授が同じくチベット・ビルマ諸語の専門家であるため，澤田氏が主としてインドおよび周辺領域を担当し，筆者が中国を中心とした領域を担当することとした。

さて，よく知られているように，各地域・各語族の参照文法書の記述方法や技術的な構成は大きく異なる。本稿で取り扱うチベット・ビルマ諸語の参照文法の記述的な枠組みも極めて特異なところがある上に，中国の伝統的な記述の方法にも独特の性格を認めねばならない。この点を十分に踏まえて，本稿ではできるだけ平明にそれらが理解できるよう説明して行きたい。

本稿の構成を以下に述べる。まず，1節で簡単にチベット・ビルマ諸語の系統分類と地理的分

林範彦. 2022.「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」. 渡辺己・澤田英夫（編）『参照文法書研究』.（アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.）pp. 107–120. DOI: https://doi.org/10.15026/116962

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

[1] 本稿の草稿は白井聡子氏（筑波大学・日本学術振興会［当時］，現東京大学講師）に多大なご指摘を頂いた。記して感謝を申し上げたい。もちろん，本稿における全ての誤謬は筆者個人に帰する。

布，さらに類型的特徴の概略を述べる。2節では主としてチベット・ビルマ諸語研究から発信された独特な術語について略説する。3節では中国のチベット・ビルマ諸語研究の様相とその諸問題について論じる。4節では中国及びその周辺領域の推薦されるべきチベット・ビルマ諸語の記述文法書について例示したい。5節で本稿を締めくくる。

1.1. チベット・ビルマ諸語の分布

チベット・ビルマ諸語は図 1（破線で囲まれた部分）に見るように，東は中国西南部である四川省や貴州省から，西はパキスタン北部にまで，北はチベット・ヒマラヤ地域から，南は東南アジア大陸部のミャンマーまで広大な地域で分布する。その故地はいまも不明であるが，これほどまでに拡散した結果，他の語族の言語との接触が起こり，各地域の語彙と文法は同一系統と言えども，豊かな多様性を見せる。

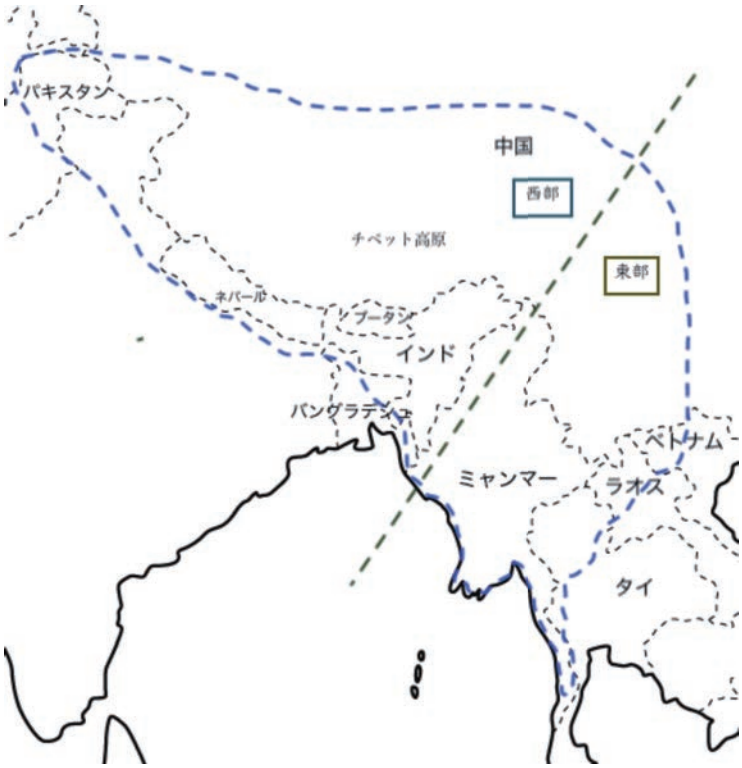

図1　チベット・ビルマ諸語の分布範囲の概略
（https://www.freemap.jp/ の地図をもとに筆者作成）

詳細な分析を施した上での分類ではないのだが，本稿では試みにチベット・ヒマラヤ地域を含む部分をチベット・ビルマ諸語の西側に，中国雲南省・四川省・貴州省やビルマ中部・東部，およびタイ・ラオス・ベトナム北部を含む地域をチベット・ビルマ諸語の東側に位置するとする。

1.2. チベット・ビルマ諸語の系統と類型論的特徴

下位語群に対する分析手法や結果は未だに一致を見ない。ここに掲げるのは代表的な言語系統に関する諸説である。図 2は Matisoff (2003) より，図 3は van Driem (2001) からである。この他にもいくつか示されてきてはいるが，いずれも同一の言語系統の関係性を示しているとは思えないほど多様性に富んでいる。特に図 3は系統樹というよりも「木の葉が落ちた形状」をモデルとしている。

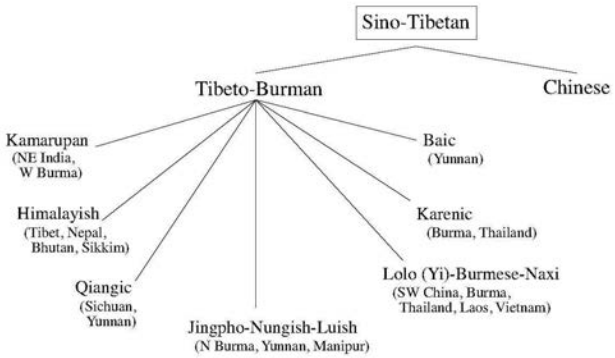

図2　Matisoff (2003) におけるチベット・ビルマ諸語の系統概略

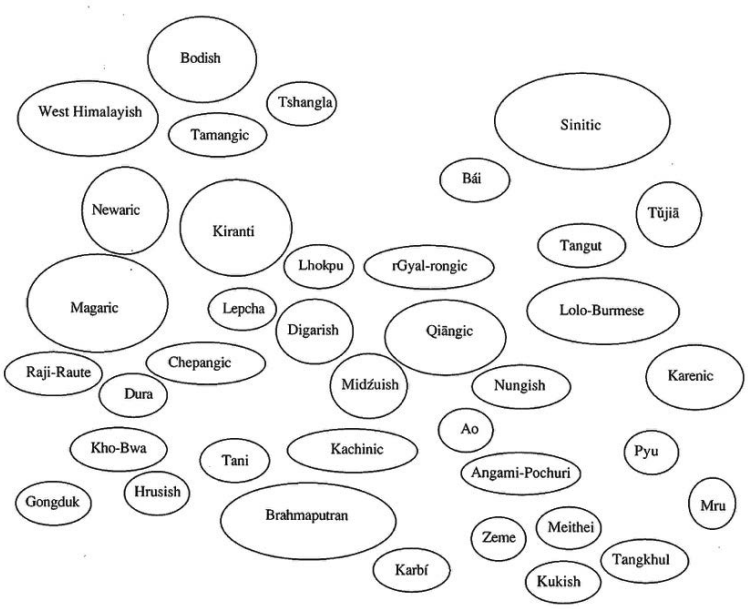

図3　van Driem (2001) によるチベット・ビルマ諸語のモデル

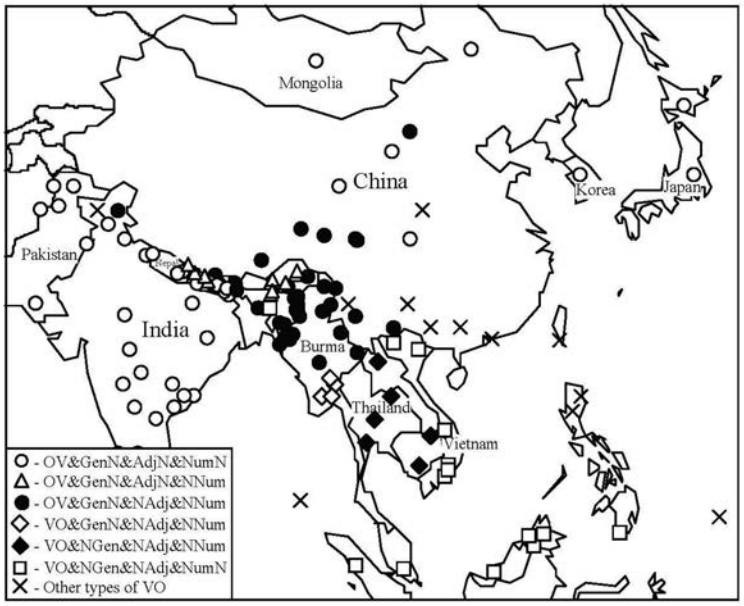

図4　アジア地域の基本語順の相関関係と地理的分布 (Dryer 2008: 73)

［**類型論的特徴**］

チベット・ビルマ諸語の類型論的な特徴をまとめる。まず語順についてであるが，大部分はSOV 型である。例外的には白語やカレン諸語，ムル語などがあり，これらはSVO 語順をとる。ただし，これらの例外的な言語は当該地域で話される有力な言語の影響により語順が変化したと考えられる[2]。形容詞を範疇として認定するかどうかは各言語によって異なるが，認められる場合は名詞に後置される場合と前置される場合の 2 パターン存在する。後置される場合はチベット・ビルマ諸語でも東側に分布し，前置される場合は西側に分布する傾向にある。図 4は Dryer (2008) の引用であるが，チベット・ビルマ諸語を含むアジア諸語全般の語順の相関関係についてその地理的分布を図示したものである。

この他，格標示については能格タイプと対格タイプの 2 種類がある。主にチベット・ヒマラヤ地域を中心とした西側に能格タイプが分布し，対格タイプは主として東側，特に中国雲南省以南から東南アジア大陸部に広く分布する傾向にある。

加えて，主にチベット・ビルマ諸語分布域の東側に分布する言語では類別詞が豊富である。チベット語の諸方言は反対に類別詞が少ない。

またチベット・ビルマ諸語分布域の東側に位置する言語は声調言語（多くは音節声調的）であることがよく見られる。他方，チベット語の諸方言は語声調的な特徴をもつ。また，中国青海省チ

[2] 中国雲南省で話される白語は周辺の漢語方言の影響を，ミャンマー東部で話されるカレン諸語はモン語あるいはタイ語などとの接触の結果，語順の変更が起きたと考えられる（Matisoff 1991 など）。

ベット語アムド方言など，声調を持たない言語も存在する（海老原 2008, 海老原 2019, ダムディン 2017 など）。このことを主な根拠として，チベット・ビルマ祖語の段階では無声調であったと推定される[3]。

1.3. 本稿の取り扱う範囲

なお，本稿では澤田英夫氏と分担し，チベット・ビルマ諸語全体の問題を取り扱うのではなく，中国国内とその周辺を中心としたチベット・ビルマ諸語の参照文法の紹介とその問題点の指摘を行う。（澤田氏の論考は本論集 pp. 121–147。）

2. 主としてチベット・ビルマ系から発信された有名な言語学用語/言語現象

本節では主にチベット・ビルマ諸語から発信された用語の中で，記述言語学あるいは言語類型論の世界において比較的有名な言語学用語や言語現象について，若干ながら取り上げたい。

2.1. sesquisyllable: 1.5 音節

まずは sesquisyllable からである。これは Matisoff (1973b) において示された東南部に分布するチベット・ビルマ諸語を中心とした新しい音節の概念である。

中国雲南省以南から東南アジア大陸部に分布する言語では 2 音節の語彙（複合語を含む）に対し，概ね iambic のストレスパターンが付与される。これにより，第 1 音節が弱化すると，母音が中舌化したり，声調が中和するなどする。そして，2 音節語は全体として第 2 音節が中心に聞こえる。この現象について，あたかも最初の音節が半分にすり減ったように捉え，1.5 倍を意味する sesqui- を冠した sesquisyllable の名称がつけられたと考えられる。

［ビルマ語 Burmese; Okell 1969: 17］

(1) *hkà* ＋ *paʔ* ＞ *hkăbaʔ, kăbaʔ, găbaʔ*
‘waist’ ‘go round’ ‘belt’

(1) のビルマ語は，「腰」を意味する *hka* と「回る」を意味する *paʔ* の複合により出来上がった「ベルト」の語を示している。Okell (1969) は 3 つの実現形の候補を示している。いずれの候補も第 1 音節の母音が弱化し (*ă*), 声調が中和している。この母音が弱化した部分を 0.5 音節と解釈して，全体を sesquisyllable とする分析である。

2.2. tonogenesis: 声調発生

上述した通り，チベット・ビルマ祖語は元来声調を持たない言語であったと推定されている。そこから下位語群に分岐する段階で，声調が発生したと考えられるが，この過程は tonogenesis（声調発生）と呼ばれている (Matisoff 1973b)。声調が発生するシステムについては，中国音韻史はもちろん，ベトナム語においても Haudricourt (1954) などでよく知られているが，tonogenesis の用語自体はチベット・ビルマ諸語研究から広まったと言えるのではないだろうか。

[3] Benedict (1972) ではチベット・ビルマ祖語の段階に 2 声調存在したと想定しているが，Matisoff (2003: 12) は祖語における声調の存在には懐疑的で，各言語の分化の過程で独自に声調を発展させたと考えている。

もっとも単純には分節音上の対立が消失した代償として，超分節音上の対立が生まれる過程であると捉えられる。以下は Haudricourt (1954) を単純化した説明である。

(2) $*\mathrm{ba} > \mathrm{pa}^{\mathrm{L}}$

$*\mathrm{pa} > \mathrm{pa}^{\mathrm{H}}$

例えば，ある言語において ba と pa の二種の語彙が存在したとする。このうち，音節初頭の b が無声化し，p となった場合，分節音として両者ともに /pa/ の形式となる。このとき，元来の /ba/ が低い声調 (L) を，元来の /pa/ が高い声調 (H) を持つことにより，語形上の対立を持つことがある。この過程が tonogenesis と考えられる。

tonogenesis の発生メカニズムについて具体的に実証している研究としては Hyslop (2009) が挙げられるので，参照されたい。

2.3. creaky vowels/ breathy vowels: 緊喉母音/ 息漏れ母音

音声学の用語としての creaky vowel（緊喉母音）と breathy vowel（息漏れ母音）の存在は一般的にも知られるところである。しかし，チベット・ビルマ諸語において普通母音とこれらの発声上の特徴を有する母音との対立が集中的に存在することは特に重要であるといえよう。

特にチベット・ビルマ諸語においては西側にあたるタマン諸語 (Tamangic) などに普通母音と弛緩母音の対立が見られる。

［グルン語 Gurung; Glover 1971: 7］

(3) /mi/: clear vowel with mid tone

/mih/: breathy vowel with low tone

(3) はタマン諸語の 1 つグルン語 (Gurung) の例である。Glover (1971) の表記では /i/ vs. /ih/ となっているが，普通の母音と息漏れをともなう弛緩母音の対立となる。多くの場合，弛緩母音は低い声調を伴う。

他方，東南部のチベット・ビルマ諸語を中心に緊喉母音も分布している。緊喉母音の音声的な多様性については鈴木 (2011) に詳しいが，概して発声時に声帯の緊張が伴う母音を指す。英語では creaky vowel とすることが多いが，研究者によっては捉え方が異なり，laryngealized vowel とすることもある。このほか発声方法の捉え方によっては pharyngealized vowel[4] とすることもある。

緊喉母音の由来は多元的である。そのうちの代表的なモデルは以下である。チベット・ビルマ諸語の形態素は 1 音節であることが多い。(4) に示すように，祖語の段階においてその音節末子音 (C_2) が阻害音であるとき，その阻害音が脱落した代償として，緊喉母音を発生させることがあると考えられている（戴 1990 など）。

(4) $*\mathrm{C_1VC_2} > \mathrm{C_1\underset{\sim}{V}}$

(5) に Hayashi (2016) からラオス北部で話されるアカ・ブリ語のデータ[5] を示す。

---

[4] 咽頭化と緊喉母音の関係の実態については Iwasa (2003) などの記述を参照されたい。

[5] 各分節音の右隣にある数字は声調を示している。これは Chao (1930) に端を発する 5 段表記法である。発話者の音域の最も高い部分を 5，最も低い部分を 1 とする。そしてデフォルトの音長では 55, 11 など数字を 2 個並列して表記する。も

［アカ・ブリ語; Hayashi 2016: 81］

(5) a. /mɛ21la55/ ‘tongue’

b. /ą21lą21/ ‘hand’

(5a) と (5b) は擬似的な最小対として捉える。(5a) の第 2 音節は普通母音なのに対し，(5b) は緊喉母音である。後者の母音の方が発声時において喉頭部分に若干の緊張がある。この後者の語根である *lą* は比較研究の結果，チベット・ビルマ祖語の *g-lak (Matisoff 2003: 319) に遡ることができると考えられる。アカ・ブリ語ではこの音節末の -k が脱落した代償として，緊喉母音 -ą に発展したと分析される。

2.4. conjunct/disjunct: 接合/離接

この用語もチベット・ビルマ諸語から広まったものと考えられよう。Hale (1980) がネワール語の記述に採用したのを皮切りに，西側に位置するヒマラヤ地域を中心に，チベット系・チアン系の一部の下位語群の諸言語の述語において conjunct/disjunct の対立があることが報告されてきた。前者は「発話者」[6]と何らかの関与のある事態について述べる場合，後者は「発話者」とは直接的な関わりのない事態について述べる場合に用いられる。

以下の例は，中国四川省で話されるダパ語の視点表示システムについて論じた白井 (2006) からの引用である。白井 (2006) によると，ダパ語メト方言にも conjunct/disjunct の対立があり，disjunct を表示する -a が付加されると，その事態に「発話者」の関与がないことを表すようである。

［ダパ語メト方言; 白井 2006: 153］

(6) a. *ˈŋa=rə ˈje ˉa-ʜpi*

[1. 単]=の 家 [方向]-焼ける

「私の家が焼けた」

b. *ˈjenʌ ˉŋorɛ=rə ˈje ˉa-ʜpi-a*

昨日 [3. 複]=の 家 [方向]-焼ける-[離接]

「昨日，彼らの家が焼けた」

本来は conjunct/disjunct のシステムは evidentiality のシステムと異なると考えられ，両者の区別についてはこれまでにも様々に議論されてきたが (Aikhenvald 2004, Creissels 2008, etc.)，Tournadre (2008) によるチベット系諸語における conjunct/disjunct の分析の無効性の議論を経て，現在は egophoricity の分析に移行してきている（Floyed et al., eds. 2018 など）。

し短い音であれば 5 や 2 などと 1 個のみで表記する。例えば，55 は高く平らな声調（高平調）を，35 は真ん中から最高音域までピッチが上がる声調（上昇調）を，21 は低いところからさらに下がる声調（低降調）を，それぞれ示す。

[6] この「発話者」とは通常の「話し手」という意味とは別個の定義が与えられる。白井 (2006: 80) では以下のように記述される。

「接合／離接 (conjunct/disjunct) システムにおいては，(i) 陳述文における話し手，(ii) 疑問文における聞き手，(iii) 伝達文（引用型埋め込み文か伝聞の文末標識を伴う文）における本来の話し手の三者が同じ扱いを受ける。」

（白井 2006: 80）

ここでは，この 3 者がともに「発話者」として同類の扱いを受けることに注意されたい。

2.5. mirativity: 驚嘆性

mirativity 「驚嘆性」とはある事態を発話時になってはじめて気づいたことを表す文法範疇として考えられている。元来は Akatsuka (1985) の “surprise” に対する分析を発端とすると考えられるが，mirativity という概念が広く用いられる契機となったのは DeLancey (1997) の研究であろう。この概念は情報構造，とりわけ evidentiality （証拠性）の問題と関連しながらも，独自のカテゴリーとして提案されたものである。以下のネパールで話されるマガール語の例を見られたい。

［マガール語 Magar; Grunow-Hårsta 2007: 175］（グロス表記は筆者による改変）

(7) a. *thapa* *i-laŋ* *le*
Thapa DEM-LOC COP
‘Thapa is here.’ (non-mirative)

b. *thapa* *i-laŋ* *le-o* *le*
Thapa DEM-LOC COP-NMZ IMPF
[I realize to my surprise that] ‘Thapa is here!’

(a) の例は通常の陳述文で，「タパがここにいる」ことを端的に表している。一方で，(b) は，発話者が発話時になって初めてタパの存在に気づいて，「タパはそこにいたのか !」という驚きを示している。このような驚嘆を示す文法範疇が特にチベット・ビルマ諸語の中でも西側，特にヒマラヤ地域を中心に分布していると考えられており，同地域の参照文法書でも独立に記述されていることが多い[7]。

2.6. 中国語の独特の用語

このほか中国の参照文法書では，多くの中国独自の用語法がチベット・ビルマ諸語の記述にも適用されている。これらはいずれも漢語文法の枠組みを援用しているのである。ここでは試みに「賓語」（宾语）「補語」（补语）の用語について略述しておこう。

「賓語」は多くは統語論の記述の箇所で，「主語 - 賓語 - 動詞」のように語順解説に用いられるところから，日本語の「目的語」に相当すると考えられることが多い。例えば 刘ほか (2005) では「動作行為が及ぶ事物である」と述べられている。しかし，実際には「目的語」よりも広い範囲を指示していると考えねばならない。例えば，同じ 刘ほか (2005) でも以下のような通常「目的語」に組み入れられないものまでが「賓語」に入れられている。

(8) a. *míngtiān* *wǒmen* *qù* *chángchéng*
明日 私たち 行く 長城
「明日私たちは長城に行きます。」（刘ほか 2005: 461 ［グロスと日本語訳は筆者］）

b. *wàibiān* *yǒu* *rén*
外 ある 人

[7] 「驚嘆性」については Hill (2012) が特段認めなくても良いのではないかという主張を展開している。DeLancey (1997) の議論はチベット語ラサ方言の助動詞 ’dug を元にして驚嘆性を主張しているが，それは直接に事態を認識していることを示しているだけで，驚嘆性を表しているのではないとするのが Hill (2012) の議論である。DeLancey (2012) は Hill (2012) に対して「驚嘆性はそれでも十分にチベット語地域の言語記述に十分寄与してきた」と反論している。

「外に人がいます。」（刘ほか 2005: 462 ［グロスと日本語訳は筆者］）

c. *tāmen zhù de fángjiānhàomǎ shì 308.*
彼ら 泊まる LINK 部屋番号 COP 308
「彼らが泊まる部屋は 308 号室です。」（刘ほか 2005: 463 ［グロスと日本語訳は筆者］）

(8) の下線を引いた名詞句はいずれも漢語文法では「賓語」とされる。(8a) は着点，(8b) は存在，(8c) はコピュラ文の名詞句であり，いずれも一般に「目的語」と分析されることはない。この点で「賓語」の用語法には注意が必要である。

続いて，「補語」について若干の説明を行う。日本語で「補語」というと，学校英文法で言うところの「先行名詞の説明語句」のように捉えられる。しかし，漢語文法の「補語」はこれとは全く異なるものである。

英語で書かれた漢語の文法である Yip and Rimmington (2016: 177) でも「補語」(complements) の概念を認め，以下のように説明している。

> "Complements are expressions that indicate in some way the result of the action of the verb or describe the way the action is or has been carried out. In the Chinese mind, they articulate a consequence that is observable in terms of outcome or manner and as such must logically follow the verb."

漢語では動詞を単独で用いることは稀で，むしろ動詞の動作行為あるいは事態が生じた場合に結果としてどうなったのか，あるいはどのような様子で行われたのかなどを示す語句が述語動詞の直後に来ることが極めて一般的である。この語句のことを「補語」と呼ぶ。

同じく Yip and Rimmington (2016) から例を挙げておこう。なお，いずれの例のグロスと日本語訳も筆者による。

(9) a. *tā xiū hǎo le wǒ de qìchē*
3SG 修理する 良い ASP 1SG LINK 車
「彼/彼女は私の車を修理してくれた。」
（Yip and Rimmington 2016: 178 ［グロスと日本語訳は筆者］）

b. *nèi ge gūniang dǎban de hěn piàoliang*
あれ CLF 女の子 おめかしする LINK とても きれいだ
「あの女の子はとてもきれいにおめかししている。」
（Yip and Rimmington 2016: 183 ［グロスと日本語訳は筆者］）

(9a) では *xiū*「修理する」の後ろに *hǎo*「良い」が置かれている。漢語では一般に「修理が完了した状態」を表すのに，*xiū* だけを用いることはしない。ほぼ必ずその結果としてどうなったのかを表す「補語」が必要で，これが後続する *hǎo* なのである。

(9b) も (9a) と近似している。少し異なるのは述語動詞 *dǎban*「おめかしする」の後ろにリンカー(LINKer) として *de* が置かれている点であるが，ここでは深く立ち入らないこととする。さらに後続する *hěn piàoliang*「とてもきれいだ」があることに注目してほしい。漢語では単純に「おめかしする」だけを生起させるのではなく，一般に「どの程度おめかししたのか」「おめかししてどうなったのか」を必ずと言って良いほど生起させる必要がある。この「とてもきれいだ」の

部分が「補語」ということとなる。

このような「補語」の用語法は一般に印欧語文法や学校英文法で用いられるそれと大きく異なるが，中国国内の漢語で書かれたチベット・ビルマ諸語の文法記述で頻出するので大変注意が必要である[8]。

3. 中国研究者の参照文法書の特徴と問題

3.1. チノ語の参照文法書について

3.1.1. 3 種の記述文法

中国研究者の参照文法における特徴とその問題について，筆者の研究するチノ語を例にとって述べてみたい。チノ語は中国雲南省の最南部である西双版納タイ族自治州の景洪市で話され，話者数の正確な人口はわからないが，総人口 23000 人の約半数から 6 割程度であると考えられる。

チノ語は悠楽方言と補遠方言の 2 種に大別されるが，そのうち悠楽方言が話者人口の 9 割を占めるとされる（蓋 1986）。現時点で包括的な記述がなされているのは悠楽方言のみであるが，これまで筆者のものを含めて 3 種の記述文法が公開されている（蓋 1986, 林 2009, 蒋 2010）。

蓋 (1986) は中国少数民族語言簡誌叢書の 1 冊である。チノ語の悠楽方言を中心に，音韻・形態・統語の 3 領域を簡便にまとめ，最後に語彙集を付したものである。チノ族は 1979 年に「最後」の少数民族として認定された経緯もあり，チノ語の全体像についてチベット・ビルマ諸語研究者から大きな注目を集めた一冊である。世界で初めて示された非常に貴重な研究であるが，簡易文法であり，また中国の伝統的な記述方法であることから，チノ語独特の特徴についてはつかみにくいことは否めない。

林 (2009) は博士論文で提示したチノ語文法の部分だけを切り出して，一冊の本として編んだものである。筆者としてはチノ語の持つ特徴を可能な限り明解に提示したつもりではあるが，紙幅の都合もあり，詳細な否定的証拠の提示や語彙集の公開が行えていない。

蒋 (2010) も博士論文として提示された記述文法の公刊によるものである。データ量が豊富で，テキストも語彙集も前二者に比べて充実している。ただし，記述方法に問題点も多い。この点は中国で公刊された参照文法に共通する問題でもあるので，以下で若干の指摘を行う。

3.1.2. 記述に対する姿勢や方法の違い：蒋 (2010)

蒋 (2010) については林 (2013) で書評をあげており（林 2013 に対する反応は蒋 2013 を参照），詳細はそれに譲るが，記述上の問題点として大きく次の 2 点を指摘することができる。

A: 音韻論に対する考え方：先達の研究をどう評価するか
B: 語類の決定：意味をどう取り入れるか

蒋 (2010) でももちろん音韻論の記述を行なっているが，それは彼の指導教授であった戴慶廈氏が 1980 年代に行った分析をそのまま引き継いだものとなっている。そのため，十分な実態分析が行えていると思われない箇所がある[9]。また中国の研究者はしばしば音声と音素を厳密に区分

[8] 例えば，3 節で紹介するチノ語を記述した蒋 (2010: 228) では「打ち勝つ」「吹き倒される」「食べ終わる」の「勝つ」「倒す」「終わる」なども「補語」とされる。

[9] 例えば，蒋 (2010) では/r/を [ɹ] と記述し，それが摩擦音であるとしている。筆者は現地でこの発音を確認できなかった。たとえ，正しかったとしても，この記号は摩擦音ではなく，接近音を示す。

せずに、文法書に記載することがあり、この点は一般的に気をつけておくべきことである。

さらにこれも中国の研究者でよく見られるのだが，語類の認定が基本的に意味をベースにした「伝統的」なものとなる。よく問題となるのが「形容詞」である。林 (2009) では形容詞は基本形において［名詞化接頭辞＋動詞性語根］の形態を持ったもののみを「形容詞」と呼んでいる。一方，蒋 (2010) などではそのような形態統語的な基準は示されず，おそらく意味的な基準によって語類の判定を行なっている。このような意味的な基準は同系統の言語の比較を行う際に便利なこともあろうが，各言語の形態統語的な特徴を描きだすことがなく，また不整合な記述がよく起こる。

3.2. 中国研究者の参考文法の長所と問題点

最近，中国国内の言語研究者による参考文法が数多く出版されている。1980 年代から中国少数民族語言叢書シリーズとして中国の公定民族を中心に簡易文法が出版されてはきた。その後 1990 年代後半ごろから，「新発現」（新たに発見された）言語のシリーズが出版され，現在に至っている。一方で，2000 年代に入り，中央民族大学（北京）の出身者を中心に少数言語の記述文法を博士論文として提出するものが増加し，その成果が「参考文法」のシリーズとして出版されてきている。

これらは誠に喜ぶべきことである。特に「参考文法」のシリーズを始め，近年の少数言語のモノグラフはデータが豊富である。非文などの否定的証拠はあまりないものの，基本的な構造に関する具体例に富んでおり，また語彙集やテキストに関しても情報量が多いと言える。この点は言語保持の観点からも重要な貢献をしているといえよう。

他方，問題点もある。中国の多くの参考文法では同じ記述の枠組み（大方は漢語文法を少し改変した程度のもの）を採用している。これらの多くの文法書では目次が荒く[10]，索引もない。したがって，この言語を知らない研究者からすると，どこに何が書かれてあるのかがすぐにはわか

[10] 下の例は蒋 (2010) のチノ語悠楽方言の参考文法の目次である。ここではわかりやすく日本語に改めた。注目すべきは全体的に大まかな節の区切り方となっているのだが，第 5 章以降は節の区切りがなくなってしまっている点である。この手の文法書に慣れるのに時間が必要かと思われる。

第 1 章　イントロダクション
第 2 章　音
　2.1 声母，2.2 韻母，2.3 声調，2.4 音節構造，2.5 サンディー
第 3 章　語形成と借用語
　3.1 語形成，3.2 四字熟語（「四音格詞」），3.3 借用語
第 4 章　語類
　4.1 名詞，4.2 代名詞，4.3 数詞，4.4 類別詞，4.5 動詞，4.6 形容詞，4.7 副詞，4.8 助詞，4.9 接続詞，4.10 感嘆詞
第 5 章　文法要素
第 6 章　単文
第 7 章　複文
第 8 章　モダリティー
付録 1　テキスト
付録 2　呪文，なぞなぞ，ことわざと俗語，歌詞
付録 3　チノ語分類語彙集
あとがき

もちろん，細かく目次の記載を行っている参考文法書もある。アチャン語梁河方言を記述した 时 (2009) や雲南省墨江県のカドゥオ語を記述した 赵・朱 (2011) はより詳細な目次となっており，参照しやすくなっている。

らないのである。

確かに同じ枠組みで記述されていることから，一つの参考文法書に慣れれば，同系統の言語の他の文法書も「引きやすい」利点もある。しかし，各言語の特徴が見えづらい点がある。例えば，前述した形容詞の例のように，語類の認定は伝統的に意味を基準として行っており，言語によっては不必要な設定や不明確な基準が散見される。具体的な問題についてはすでに **3.1.2**で述べた通りであるが，一般的な現象であると考えられる。

4. 中国周辺領域の良質な TB 参照文法書

中国周辺領域におけるチベット・ビルマ諸語の参照文法書と呼べるものは 1980 年ごろまでは Jin (1949) や高 (1958) のような古典的な枠組みに則ったものがいくつか見られる程度であった。その中でも Matisoff (1973a) は金字塔的作品と呼べるもので，長期間のフィールドワークから紡ぎ出された詳細なラフ語［タイ北部］の文法記述は今でも目を見張るものがある。その後，中国においては 1950 年代の現地調査で得られたデータを元にした「中国少数民族語言簡誌叢書」のシリーズが編まれ，中国国内外の研究者がここに示されたデータを頻繁に引用するようになった。ただ，これはあくまで「簡易文法」であり，その言語の概要を漢語文法の枠組みで整理したものに過ぎないものが多く，詳細が不明な部分が少なくない。

中国周辺領域のチベット・ビルマ諸語における参照文法書は，その分析の深さや記述の合理性の観点からやはり日本発あるいは欧米系の研究者のものに良質な研究が見られる。例えば，加藤 (2004), 藤原 (2008), Kurabe (2016) などは豊富なデータとともに，合理的な記述が提示されている。この点は欧米の研究でも同様で，Bartee (2007), Lidz (2010), Hyslop (2017) など最近では記述文法の公開が盛んに行われている。特にヒマラヤ地域のものは Brill のシリーズが充実しており，高価ながらも良質な文法を読むことが可能となっている。

中国の研究者による文法記述も精緻化が図られるようになってきている。上述の通り，1990 年代には「新発現」叢書シリーズが発刊され，現在に至っている。また博士論文の公刊も増えてきている（「参考文法」シリーズ）。加えて，欧米諸国（あるいは香港など）で博士課程を経験する若手研究者も続々と現れ，Huang (2004), Yu (2007), Ding (2014), Zhang (2016) などはその先鞭となる。中でも Huang (2004) や Yu (2007) は母語であるチアン語・リス語の記述であり，従来の母語話者による記述よりも更に一般の言語研究者に理解されやすいものとなっている。

5. おわりに

世界各地で少数言語の消滅の危機は認知されているが，中国国内においても危機言語（「濒危语言」）への関心が高まりつつある。危機言語の研究プロジェクトへの補助金も多く，博士論文として参照文法を執筆し，優れたものは出版されてきている。また社会言語学的な言語の使用状況についても，詳細な報告（戴主编 2007 など）が続々と出版されている。

ただ，特に言語の使用状況に関する研究では，個人名はおろか，その性別・年齢・学歴をはじめとした個人情報や言語能力が記載されていることがある。これらの研究は，個人情報保護に厳しい昨今の国際的な水準からすると問題視されるだろう。記述言語学および言語類型論的観点から本地域の言語研究の成果を利用する場合，上記のことに留意しながら，分析・整理を進めたい

ところである。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016–2017 年度）の成果の一部である。

参考文献

[DL] はダウンロード可能な文献を示す。

＜日本語文献＞

海老原志穂 2008 「青海省共和県のチベット語アムド方言」東京大学博士論文.

——— 2019 『アムド・チベット語文法』東京：ひつじ書房.

加藤昌彦 2004 「ポー・カレン語文法」東京大学博士論文. [DL]

鈴木博之 2011 「チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態」『言語研究』140: 147–158. [DL]

白井聡子 2006 「ダパ語における視点表示システムの研究」京都大学博士論文.

ダムディンジョマ 2017 「チベット語アムド農民方言—音韻体系と文法の基本構造—」神戸市外国語大学博士論文.

林範彦 2009 『チノ語文法（悠楽方言）の記述研究』神戸：神戸市外国語大学外国学研究所. [DL]

藤原敬介 2008 「チャック語の記述言語学的研究」京都大学博士論文.

＜中国語文献＞

戴庆厦 (Dai Qingxia) 1990 〈藏缅语族松紧元音研究〉戴庆厦《藏缅语族语言研究》, 1–31, 昆明：云南民族出版社.

———（主编） 2007 《基诺族语言使用现状及其演变》北京：商务印书馆.

盖兴之 (Gai Xingzhi) 1986 《基诺语简志》北京：民族出版社.

高華年 (Gao Huanian) 1958 《彝語語法研究》北京：科学出版社.

蒋光友 (Jiang Guangyou) 2010 《基诺语参考语法》北京：中国社会科学出版社.

——— 2013 〈书评回应：答林范彦先生〉《语言学论丛》第 47 辑, 365–367, 北京：商务印书馆.

林范彦 (Hayashi, Norihiko) 2013 〈书评：《基诺语参考语法》〉（蒋光友著，中国社会科学出版社, 2010）《语言学论丛》第 47 辑: 357–363, 北京：商务印书馆.

刘月华 (Liu Yuehua) 等 2005 《实用现代汉语语法》（增订本）北京：商务印书馆.

时建 (Shi Jian) 2009 《梁河阿昌语参考语法》北京：中国社会科学出版社.

赵敏 (Zhao Min)・朱茂云 (Zhu Maoyun) 2011 《墨江哈尼族卡多话参考语法》北京：中国社会科学出版社.

＜欧文文献＞

Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

Akatsuka, Noriko. 1985. “Conditionals and the Epistemic Scale.” *Language* 61: 625–639.

Bartee, Ellen. 2007. “A Grammar of Dongwang Tibetan.” Ph.D. dissertation to UC Berkeley.

Benedict, Paul K. 1972. “The Sino-Tibetan Tonal System.” *Langues et Techniques, Nature et Société* Vol. I (Jacques Barrau et al., eds.), 25–34, Paris: Klincksieck.

Chao, Yuen-Ren. 1930. ‘ə sistim əv “toun-letəz”’ [A system of “tone-letters”]. *Le Maître Phonétique* 30: 24–27.

Creissels, Denis. 2008. ‘Remarks on So-Called “conjunct/disjunct” systems.’ Paper presented at the conference Syntax of the World’s Languages III, Free University of Berlin, September 25–28. http://www.deniscreissels.fr/public/Creissels-conj.disj.pdf

DeLancey, Scott. 1997. “Mirativity: The Grammatical Marking of Unexpected Information.” *Linguistic Typology* 1: 33–52.

———. 2012. “Still Mirative after All These Years.” *Linguistics Typology* 16.3: 529–564.

Ding, Picus Sizhi. 2014. *A Grammar of Prinmi: Based on the Central Dialect of Northwest Yunnan, China*. Leiden: Brill.

van Driem, George. 2001. *Languages of the Himalayas* (2 volumes). Leiden: Brill.

Dryer, Matthew. 2008. “Word Order in Tibeto-Burman Languages.” *Linguistics of Tibeto-Burman Area* 31.1: 1–83. [DL]

Floyed, Simeon, Elisabeth Norcliffe, and Lila San Roque, eds. 2018. *Egophoricity*. Amsterdam: John Benjamins.

Glover, Warren. 1971. “Register in Tibeto-Burman Languages of Nepal: a Comparison with Mon-Khmer.” *Papers in Southeast Asian Linguistics* 2 (W. Glover, M. Hari and E. Hope, eds.) (Pacific Linguistics A-29), 1–22, Canberra: Pacific Linguistics. [DL]

Grunow-Hårsta, Karen. 2007. “Evidentiality and Mirativity in Magar.” *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30.2: 151–194.

Hale, Austin. 1980. “Person Markers: Finite Conjunct and Disjunct Forms in Newari.” *Papers in Southeast Asian Linguistics* 7 (R. Trail, ed.) (Pacific Linguistics A-53), 95–106, Canberra: Pacific Linguistics. [DL]

Haudricourt, André G. 1954. “De l’origine des tons en vietnamien.” *Journal Asiatique* t. 242: 69–82.

Hayashi, Norihiko. 2016. “A Phonological Sketch of Akha Buli —A Lolo-Burmese Language of Muang Sing, Laos—.” *Research in Asian Languages* 10: 67–98, Kobe: Research Institute of Foreign Studies, Kobe City University of Foreign Studies.

Hill, Nathan. 2012. “‘Mirativity’ Does Not Exist: *ḥdug* in ‘Lhasa’ Tibetan and Other Suspects.” *Linguistic Typology* 16.3: 389–433.

Huang, Chenglong. 2004. “A Reference Grammar of the Puxi Variety of Qiang.” Ph.D. dissertation to City University of Hongkong.

Hyslop, Gwendolyn. 2009. “Kurtöp Tone: A Tonogenetic Case Study.” *Lingua* 119: 827–845.

———. 2017. *A Grammar of Kurtöp*. Leiden: Brill.

Iwasa, Kazue. 2003. “Axi and Azha—Descriptive, Comparative, and Sociolinguistic Analyses of Two Lolo Dialects of China.” Ph.D. dissertation to Kobe City University of Foreign Studies.

Jin, Peng. 1949. “Etude sur le Jyarung.” *Han Hiue* 3: 211–310. （Translated into Chinese as《嘉戎语（杂谷脑方言）研究》in 1988, and reprinted into《金鹏民族研究文集》北京：民族出版社, 1–95.）

Kurabe, Keita. 2016. “A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma.” Ph.D. dissertation to Kyoto University.

Lidz, Liberty. 2010. “A Descriptive Grammar of Yongning Na.” Ph.D. dissertation to University of Texas, Austin. [DL]

Matisoff, James A. 1973a. *The Grammar of Lahu*. (University of California Publications in Linguistics, No. 75.) Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.

———. 1973b. Tonogenesis in Southeast Asia. *Consonant Types and Tone* (Larry M. Hyman, ed.) (Southern California Occasional Papers in Linguistics, No. 1), 71–95, Los Angeles: UCLA. [DL]

———. 1991. “Sino-Tibetan Linguistics: Present State and Future Prospects.” *Annual Review of Anthropology* 20: 469–504. [DL]

———. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press. [DL]

Okell, John. 1969. *A Reference Grammar of Colloquial Burmese.* Vol. I. Oxford: Oxford University Press.

Tournadre, Nicolas. 2008. “Arguments against the Concept of ‘Conjunct’/‘Disjunct’ in Tibetan.” *Chomolangma, Demawend und Kasbek: Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65. Geburtstag* (B. Huber, M. Volkart and P. Wildmer, eds.), 281–308, Halle: IITBS.

Yip, Po-Ching and Don Rimmington. 2016. *Chinese: a Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge.

Yu, Defen. 2007. *Aspects of Lisu Phonology and Grammar, a Language of Southeast Asia.* (Pacific Linguistics 588.) Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.

Zhang, Sihong. 2016. *A Reference Grammar of Ersu: a Tibeto-Burman Language of China.* (LINCOM Studies in Asian Linguistics 85..) München: LINCOM.